

# 海老原宏美基金のつどい 全体の概要を紹介

(大村参加記)

2025.1.25

大村 賢

<第2回> 海老原宏美基金のつどい 開催チラシ

風よ君の声がする

えびはらひろみ  
海老原宏美  
基金  
THE EBIHARA HIROMI  
FOUNDATION

## 海老原宏美基金のつどい

<第2回>

“あたり前”をとときほぐす  
～すべての人の学校をかんがえる～

✦ 第2回 助成事業中間報告会

日

2025年 (土)

1月25日

13:00～16:00

### お申込み



ご寄付もこちら  
で受け付けてい  
ます!

<https://ebifund20250125.peatix.com>

• 電話・メールでも受け付けています

### -企画趣旨-

今年度の海老原宏美基金のつどいは「学校」をテーマに、所、学校。そこは、子どもたちにとって、楽しく、生活する場所。しかし、不登校30万人時代といわれるように、学校は、これまでの学校の「あたり前」が、いなくなっていることを意味しているのではない、学校は、学校の何が、どのように硬直しているのか、をみんなで語り合います。現代の学校がそうであるのではない、すべての人にとって開かれた場を創ります。みなさん、一緒に語り合いませんか?

えびはらひろみ  
海老原宏美  
基金  
THE EBIHARA HIROMI  
FOUNDATION

おかしを食べながら  
話したい人、聞きたい人...  
みんなで考えてみましょう

### ▼ タイムスケジュール

- 12:30- 受付
- 13:00- 開会
- 13:10- 第2回助成事業中間報告会(3つの団体・個人より)
- 13:40- 休憩
- 13:50- “あたり前”をとときほぐす～すべての人の学校を考える～

- 13:50- はじめに
- 14:00- パート1 自己紹介・「わたしの学校経験」について話そう・聞こう
- 14:35- パート2 「学校のいま」について話そう・聞こう
- 15:05- みんなでシェアしよう
- 15:15- 休憩
- 15:25- パート3 「居心地のいい学校」について話そう・聞こう
- 15:55- みんなでシェアしよう



16:05- 閉会 ※会場が17:00までとなるため速やかに退場をお願いいたします

### ▼ 中間報告者紹介

柳井 美紀さん

インクルーシブ教育を実施するために  
必要な事と解決すべき問題の調査

下山 結衣さん

未就学児向け多様性への  
寛容さ尺度の信頼性・妥当性の検証

羽塚 順子さん

障害者の手仕事を介助する  
“半福半X”の若者育成事業

### ▼ 話題提供者紹介

宮澤 弘道さん

- 1977年、東京都生まれ。都内公立小学校教員。「道徳の教科化を考える会」代表。(株)現代書館「季刊 福祉労働」編集委員。
- 著書に『「特別の教科 道徳」ってなんだ?』(現代書館)、編著に『つまり、合理的配慮ってこういうこと!?』(現代書館)他。

保坂 堅一さん

- 星槎国際高等学校 職員
- 中学校にて不登校となり、通信制の高校に進学。高校にて様々な形の学びを経験し、現在星槎大学にて教員免許の取得を目指すと同時に星槎国際高等学校にて職員として勤務。

### ▼ イベント企画に向けて



海老原宏美さんは、子どもたちの可能性に希望を見ていました。未来をつくる子どもたちにとって、教育はもっとも大切なもの。でも、いまの教育は、わかる／わけない、できる／できない、で子どもたちをがんじがらめしているのかもしれない。そんな教育をとときほぐすために、私たちは「学校のいまを知ろう!」と考え、3回にわたる勉強会を開催しました。「インクルーシブ教育のジレンマ」・「学校教員の置かれた現状と葛藤」・「不登校の経験と支援」。こうしたテーマについて報告してもらい、「学校のいま」を学びました。イベント当日はみなさんと語りあい、学校の「あたり前」をとときほぐしたいと思います。運営委員一同

首記イベントが1月25日 ハミングホールにて開催されました。

海老原さんの志を継ぐ人たちにより設立された「海老原宏美基金」による第2回目の報告会でした。

大村もインクルーシブ教育、インクルーシブ社会に大いに関心がありますので、参加しました。その時の模様を以下お知らせします。

皆さんが少しでも関心を持たれ、少しでも行動してみようと思っていただけたらと思います。

## 1. 海老原宏美さんの紹介

1977年 誕生。1歳半で「ウェルドニツ・ホフマン病」で3歳までの命と診断される。

1984年 川崎市立中学校の通常クラスに入学。

以降、高校まで通常クラス。

1997年 東洋英和女学院大学入学。アパートで自活生活始める。

学生ボランティアに介助を依頼。

2001年 東大和市転入。

2002年 呼吸器導入の為入院。24時間酸素吸入と夜間の呼吸器使用となる。

2008年 自立生活センター東大和 理事長就任。

2009年 東大和市地域自立支援協議会会長に。

2015年 NHKハートネット出演。東京都自立支援協議会副会長に。

2017年 東京都女性活躍推進大賞を受賞。

東京インクルーシブ教育プロジェクト（TIP）発足、代表に。

2021年12月24日 肺性心により死去 享年44才。

著書：「わたしが障がい者じゃなくなる日」、「まあ、空気でも吸って」

海老原さんを題材にした映画：「はるかなる」、「風はいきよという」

親和自治会の会員（3組）でもありました。

（自立生活センター東大和 も親和自治会会員（2組）です）

2019年から親和自治会の防災活動検討メンバーとして、防災活動立上げに尽力いただきました。被災した際、重度の障がい者である海老原さんを如何に支援するか、という課題から現在の「親和カード」がスタートしました。その内容と活動方法を評価いただき、2024年 第20回地域の防火防災功労賞「優良賞」を受賞、またJCOMの地域の防災活動紹介番組で紹介されました。

## 2. 海老原宏美基金 設立の趣旨（設立趣意書より抜粋）

海老原さんが目指した社会の実現ははまだ道半ば。2022年、海老原さんの志を実現するため、同じ志を持つ個人・団体を助成する基金が立ち上がった。

（以下、設立趣意書より抜粋）

海老原さんは、「障がい」とは社会が生み出す「生きにくさ」と言いました。その「生きにくさ」を取り払い、「すべての障がい者が平等に、あたりまえに享受するはずのもの」として次の5つを指摘しています。

（著書『まあ、空気でも吸って』の3ページより）

- 重度障がい者が家族に依存せずに地域でいられること。
- 医療的ケアの必要な人が医療従事者の管理下に置かれなくても地域で生きられること。
- 障がいがあってもリスクと困難の中に生きがいを見つけられるということ。
- 人とつながり合うことで広い世界に生きられるということ。
- 障がいのある人も障がいのない人とまったく同じ人権をもつということ。

これは海老原さんの人権宣言と言えるでしょう。

そして、海老原さんは「私の志」として、以下の様に書きます。

（著書『まあ、空気でも吸って』の119-120ページより）

「障がい者、健常者関係なく、個人個人のお互いの価値観を理解し合える可能性を信じて、伝え続けること」、そして「お互いを理解し合えた人たちでどんどんつながって、理解し合える喜びを周りに伝えていくこと」が私の志。そうやってつながっていくことで、人の多様性を認め合い、受け入れ合い、支え合える社会になると信じています。

この基金では、おもに次の3つの分野で、志を持って活動する個人・団体に助成金を提供し、これからの「社会改革」に向けた取組を応援します。

- ①若手障がい者の育成と自立支援
- ②インクルーシブ教育の普及・促進
- ③“自分らしさ”を支える介助者の育成

## 第1部 第2回助成事業中間報告会

6つの個人・団体が助成獲得された。

当日は6つのうち、3つの個人・団体から報告があった。（●印の個人・団体）

(1) 障がい種別をこえた若手障がい者の育成と自立支援  
該当者なし

(2) インクルーシブ教育の普及・促進

○「障がい」児・者の生活と進路を考える会

事業名：第12回子育て・教育講演会

助成金額：20万円

●下山結衣

事業名：未就学児向け多様性への寛容さ尺度の信頼性・妥当性の  
検証

助成金額：30万円

○リズムの会

事業名：「鶴見で一緒に考えよう！『ともに学ぶ』教室のこと」

助成金額：8万円

●柳井美紀

事業名：インクルーシブ教育を実施する為に必要なことと解決すべき問  
題の調査

助成金額：15万円

(3) “自分らしさ”に伴走する介助者の育成

○川崎つながる会

事業名：神経難病患者の外出支援における学生ボランティアの育成  
事業

助成金額：7万円

●羽塚順子

事業名：障がい者の手仕事を介助する“半福半×”の若者育成事業

助成金額：30万円

## 第2部 グループ討議（概要紹介）

### 1. テーマ：“あたり前”をときほぐす～すべての人の学校を考える～

パート1：私の学校経験

パート2：学校の今

パート3：居心地のいい学校

### 2. 大村が参加したグループのメンバー紹介（以下敬称略）

#### 田丸敬一郎

AAR JAPAN職員。福岡県出身。全盲。小学校入学時、「全盲児が普通小学校に進学するのは九州初」とニュースになった。大学卒業後カナダに6年留学し、ソーシャルワークを学んだ。

（グループ進行役）

#### 川端 舞

つくば自立生活センターメンバー。脳性まひ。日常生活には介助者が必要。筑波大学卒業。

#### 飯田和樹

ジャーナリスト  
災害・防災を「社会的」「科学的」の両視野から取材。ダウン症のある子の父として「インクルーシブ教育」も重要なテーマとしている。

#### 下山結衣

東京大学大学院。第2回海老原宏美基金助成金を獲得。テーマは「未就学児向け多様性への寛容尺度の信頼性・妥当性の検証」

#### 関 綾子

東大和市市議会議員  
（無所属）

### 3. 話題提供者（グループ討議の途中で経験談、自身の考え、など話す） 紹介

#### 宮澤弘道

都内公立小学校教員。  
「道徳の教科化を考える会」代表。  
かつて、精神障がいの教え子を病院に入院させたことを大変後悔し、退院後向き合い方を変えた経験をもつ。

#### Hさん

星槎国際高等学校（※）職員  
中学校で不登校になり、通信制の高校に進学。高校にて様々な学びを経験し、現在星槎大学で教職免許の取得を目指しながら、星槎国際高校の職員として勤務。

（※）星槎国際高等学校

なかなか学校に通えなかった人も、進学したい人も、プロスポーツを目指す人も、10人いたら10通りの学びを経験できる。全員にえこひいきする高校。週5日～月1日の間で選択できる登校日数、110種類の選択授業など。

## 4. グループ討議の概要（順不同）

### （パート1）私の学校経験

- 小・中学校では、障がい（脳性まひ）を持つ子もクラスにいた。高校になって学園祭の準備をする際、自然に通路やイベント（迷路）の設営時、車椅子でも通れるように配慮していた。経験のない友人は気づかなかった。  
（大阪地区は、昔から障がい者も「通常クラス」に入れる学校が多かった）
- 小中学校では介助者がいたので、クラスの人との接点がありませんでした。高校では介助者がいなかったため、周りの人に頼る様になったが最初どう声をかけたらいいかわからなかった。次第に慣れ、友だちもできました。

### （パート2）学校の今

（話の全体の印象を下記）

- 運動会でも順位を付けず、など気を使い過ぎている。一方で算数の授業では成績によりクラスを分けている。

### （パート3）居心地のいい学校（健常者にも障がい者にも）とは

- 細かくはいろいろやるべきことがあるそうだが、基本的な考え方としては、学校とそれを取り巻く人々が楽しく、余裕をもってことに当たっているか、が最重要と考える。（よく言われる「Well-being」）

先生（個人だけでなく先生同士の相談も含め）が余裕をもって考え、行動することが重要で、そのためには親（PTA？）を含めた地域住民の協力が欠かせない。そういう意味でのCS（Community School）をつくるべき。

最近、先生の給与を上げるなどの話を聞かすが、給与を上げたら先生が余裕をもって良い授業、指導が出来るようになるわけではない。インクルーシブ教育を推進する為にも、余裕を生み出す為の地域の協力を考えるべき。

## 5. 全体を通しての大村の感想

インクルーシブ教育、インクルーシブ社会（共生社会）に携わっている方、強い関心を持っている方、障がいを持っている方、約70名が非常に熱心に議論する場に接し、大変感動しました。しかし、インクルーシブ教育・社会の実現には程遠いことも実感しています。社会の一員として皆さんがこの課題に対して強い関心を持ち、1歩でも行動することが大事であり、そのための教育・指導を年齢関係なく実施することが大事と思っています。子どもは学校を通してすこしづつその話題に体験も含めて接していると思われませんが、特に中高齢者はその機会がなく、インクルーシブ生涯教育としてインプットする必要があると思っています。皆さんも是非考えてみてください。宜しくお願いします。